

《年間テーマ》神の家のよろこび

2024年7月7日 担当：石井祥裕

第2回 神の家のあゆみ

麴町聖イグナチオ教会の現聖堂献堂25周年にちなみ、今期の年間テーマは「神の家のよろこび」とされています。「神の家」とは、教会堂・聖堂という建物だけではなく、そこに集う神の民、神の家族としての信仰共同体、そして、この共同体によってささげられる典礼祭儀も含むとても含蓄の深い言葉です。もちろん、歴史の歩みの中で、教会共同体のあり方や典礼の姿も変化を遂げ、それは聖堂の造りや要素にも反映されてきました。今回は、旧約時代から始まる神の民の歩みと結びついている典礼空間の考え方や聖堂の姿の展開について主なポイントを確かめ、わたしたちの教会共同体と典礼のあり方を考える一つの視点としていきたいと思えます。

はじめに 「神の家」ということば

現代の典礼刷新の目標を告げる教皇ピウス10世のことば

【1903年「教会音楽の刷新について」の教令 抜粋】

「私の最も切なる望みは、真のキリスト教的精神があらゆる観点から開花し、すべての信者において保持されることにあるので、私は、何よりもまず神の家の聖性と尊厳のために配慮しなくてはならないと思う。というのは、そこは、信者がまさにキリスト教精神をその第一の、かつ不可欠な源泉から汲むために集まるところだからである。最も聖なる神秘と教会の公的祭儀的祈りへの行動的参加から、信者はこの源泉を汲むのである。」

典礼の抜本的な刷新と促進を目指している「典礼憲章」のことば

【1963年 第2バチカン公会議「典礼憲章」】

14) 母なる教会は、すべての信者が、十全に、意識的かつ行動的に典礼に参加するよう導かれるよう切に望んでいる。このような参加は、典礼そのものの本質から求められるものであり、キリストを信じる民は、「選ばれた民族、王の系統を引く祭司職、聖なる国民、神のものとなった民」(1ペト2:9)として、洗礼によってこのことに対して権利と義務を持っている。

全会衆によるこの十全かつ行動的な参加は、聖なる典礼を刷新し促進にあたって、もっとも留意すべきことである。このような参加は、信者が真のキリスト教精神のよりどころとする第一の、欠かすことのできない源泉だからである。したがって、司牧者はすべての司牧活動において、必要な教育を通して熱心にこれを追求しなければならない。……

「神の家」—「神の家族＝神の民」の共同体の典礼という営みそのもの、そして その場
そのあり方のヒント すべてのキリスト者の典礼への行動的参加

「神の家」のあゆみ 典礼とそれへの参加の姿のあゆみ 背景、始まりと変遷、そして今
典礼の場、典礼空間の変遷を通して考える

わたしたちの典礼空間の体感を思い起こしながら、
神の民の典礼のあゆみを考えてみましょう

1. 神の民が経験した、神との交わりと一致の意味、その場へのヒント

a) 旧約聖書から照らし出されること

* 族長の礼拝：「アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。……

そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ」（創12:7-8）

主（神）の名を呼ぶこととしての礼拝

* 幕屋建設：「神の民」（出19:4-6参照）とされたイスラエルの民の礼拝所

「わたしのための聖なる所を彼らに造らせなさい。わたしは彼らの中に住むであろう。

わたしが示す作り方に正しく従って、幕屋とそのすべての祭具を作りなさい」（出25:8-9）

神が民とともにおられる方であり、そのことがあかしされることとしての礼拝、その場

* 神殿建設：王国の都エルサレムにソロモン王が建設 cf. 王上4-8章（代下2-7章参照）

「神は果たして地上にお住まいになるのでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることはできません。わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。わが神、主よ、ただ僕の祈りと願いを顧みて、今日 僕が御前にささげる叫びと祈りを聞き届けてください。そして、夜も昼もこの神殿に、この所に御目を注いでください。ここはあなたが、『わたしの名をとどめる』と仰せになった所です」（列王記上 8:27-30）

神殿は一般には「神の住まい」だが、神は創造主、地上の物質的な建物におさまる存在ではない、祈りの場、神の「名」が住まうところ

* 神殿再建：エズラ記、ネヘミア記 8-9章参照⇒（第二）神殿と律法を中心とした宗教生活の再建

神殿での犠牲奉獻（いけにえをささげる行為）が礼拝の中心となるが、

このことが神と神の民の一致（救い）の完成の姿として待望されるようになる

* 普遍的礼拝への志向性とエルサレム志向性：

「日の出る所から日の入る所まで、諸国の間でわが名はあがめられ、至るところでわが名のために香がたかれ、清い献げ物がささげられている。」（マラキ1:11）

* 聖書的な神礼拝に付随する空間感覚 「神の御前」の意識

◎ 詩編（新共同訳）における「御前」の用例抜粋

18:7 「苦難の中から主を呼び求め、わたしの神に向かって叫ぶと、その声は神殿に響き、叫びは御前に至り、御耳に届く」

22:28 「地の果てまで、すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り、国々の民が御前にひれ伏しますように。」

51:13 「12）神よ、わたしのうちに清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください。

13）御前からわたしを退けず、あなたの聖なる霊を取り上げないでください」

68:5 「神に向かって歌え、御名をほめ歌え。……その名を主と呼ぶ方の御前に喜び進め」

86:9 「主よ、あなたがお造りになった国々はすべて、御前に進み出て伏し拝み、御名を呼びます」

95:2 「御前に進み、感謝をささげ、楽の音に合わせて喜びの叫びをあげよう」

6 「わたしたちを造られた神、主の御前にひざまずこう」

98:6 「ラッパを吹き、角笛を響かせて、王なる主の御前に喜びの叫びをあげよ」

100:2 「喜び祝い、主に仕え、喜び歌って御前に進み出よ」

116:9 「命あるものの地にある限り、わたしは主の御前を歩み続けよう」

119:169 「主よ、わたしの叫びが御前に届きますように。」

170 「わたしの嘆願が御前に達しますように」

140:14 「主に従う人は御名に感謝をささげ、正しい人は御前に座ることができるでしょう」

141:2 「わたしの祈りを御前に立ち昇る香りとし、

高く上げた手を夕べの供え物としてお受けください」

神殿礼拝の体験に基づきつつ、神とともに生きることの普遍的な形象ともなっている

- * 根本にあること：神に呼ばれた者（たち）には神の名が住む。
- * 神の御前で神の名を呼ぶこととして礼拝がある。集会の礼拝が基本でありつつ、個人も祈る。
＝礼拝・祈りは、いどこにいても行われる（と同時に）
旧約では、エルサレム中心の救済史観を有する
- * 神はすべてを超えて造られる方、神と交わりは特定の場所に限定されないが、
- * ある場所（エルサレム）がその“しるし”となる。

旧約から新約へ

*ユダヤ人の住むところの広がりとともに会堂礼拝形成

会堂（〔ヘブライ語〕ベート・クネセット＝集会の家／〔ギリシア語〕シュナゴーゲー＝集い）
ことばの祈りのささげものとしての礼拝がなされる信仰共同体の集会）

家々（家族共同体）での会食礼拝（安息日の食事、過越祭の食事など）

賛美・感謝の祈りのうちに行われる食事が典礼的意味を持っていく

b) 新約聖書から照らし出されること

*イエスの活動の場： 会堂／湖畔／山／野原／
道／家／神殿……十字架上……

あらゆる場所が、神の子としての神の栄光の現れの場となっていく

とくに家で食事／食べ物を提供する集いの場、そして最後の晩餐の高間

⇒ キリスト教の典礼集会の源となっていく：「主の晩餐」「主の食卓」「パンを裂くこと」

*キリストという方、キリスト者の生き方などが、場所イメージで語られる例

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」（マタイ18：20）

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた（幕屋をもった）」（ヨハネ1：14）

「『この神殿を壊してみよ。三日で建て直して見せる』……

イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである」（ヨハネ2：19,21）

「あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。…

まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る」（ヨハネ4：21,23）

「あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです」（1コリント6：19）

「あなたがたは、……聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです」（エフェソ2：19-21）

神殿（神がともにおられるしるし）が、エルサレムの神殿ではなく、

キリスト自身、そしてキリスト者一人ひとり、教会へと徹底化、普遍化していく

*新約聖書における「神の御前」の意識

回心に関して

ローマ 14:22 「あなたは自分が抱いている確信を、**神の御前**で心の内に持っている。自分の決心にやましきを感じない人は幸いです。

一コリント 1:29 「また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。29 それは、だれ一人、**神の前**で誇る事が無いようにするためです。

二コリント 4:2 「かえって、卑劣な隠れた行いを捨て、悪賢く歩まず、神の言葉を曲げず、真理を明らかにすることにより、**神の御前**で自分自身をすべての人の良心にゆだねます」

ヘブライ 4:13 「更に、**神の御前**では隠れた被造物は一つもなく、すべてのものが神の目には裸であり、さらけ出されているのです。この神に対して、わたしたちは自分のことを申し述べねばなりません。」

ヤコブ 4:10 「**主の前**にへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高めてくださいます。」

すべての人の救いのための祈り（共同祈願）に関して
一テモテ 2:1-3 「そこで、まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。王たちやすべての高官のためにもささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穏で落ち着いた生活を送るためです。これは、私たちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです。」

神賛美、感謝、礼拝一般

黙示録 4:10 「二十四人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、自分たちの冠を玉座の前に投げ出して言った。」

11:16 「神の御前で、座に着いていた二十四人の長老は、ひれ伏して神を礼拝し、こう言った。『今おられ、かつておられた方、全能者である神、主よ、感謝いたします。』」

→ミサの祈り、祈願、すべての根底にある神の御前の意識

「神よ、主よ、父よ」という呼びかけ

回心の祈り「全能の神と兄弟姉妹の皆さんに告白します」

2. キリスト教典礼の創成期 普遍的な礼拝意識の具体的表現のあゆみ

(1) 初期：「神の家」(Domus Dei)、「教会の家」(Domus Ecclesiae)

教会＝エクレシア：神に呼ばれた者たちの集い ⇒共同体であることが根源的

「彼ら（プリスカとアキラ）の家に集まる教会の人々にもよろしく伝えてください」

(ローマ16:5; 参照1コリント16:19)

「(信者たちは)、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していた……」(使徒言行録2:46-47)

家規模の教会における部屋の機能の分化

ユスティノス『第一弁明』(2世紀半ば)

「(水場で)洗礼を授けてから、『兄弟』と呼ばれる者たちの所に連れて行きます」

(2) キリスト教典礼の確立と大聖堂建築の始まり(4～6世紀)

キリスト教の宣教の歩みの中で、諸宗教の「神殿」を転化した場合もまれにあるが、主には、公会堂建築を転用した大聖堂形成に向かう

: 神の民の礼拝集会の中での奉仕による空間分化(祭壇、教役者の位置、会衆の位置など)

コンスタンティヌス大帝時代(4世紀前半)

モデル①多目的公会堂建築「バジリカ(長方形型)」

モデル②霊廟建築「集中式」(十字架型・八角形・三葉形・四葉形・円形・楕円形等)

ビザンティン様式:「集中型」基本

*入信の典礼(洗礼堂・控え室)から大聖堂への動きの記憶

*典礼の中で展開される救済史(聖書)のイメージ表現(キリスト教美術)の発達と関連

*コミュニケーションの一体性を前提とした典礼祭儀における行動的参加のための歌

→ 現代の教会が直面する状況でもある

3. 西洋の聖堂建築と典礼のあゆみ

(1) 各時代の教会と社会（世界）とのかかわり方の反映として変遷（詳細略）

- *カロリング朝建築（8c.後半～9c.末）：東方的集中型と長方形バジリカが組み合わせに特徴
- *オットー朝建築（10c.半ば～11c.半ば）：東西袖廊をもつ多塔形式に特徴
- *ロマネスク建築（10c.後半～12c.）：ラテン十字架形のバジリカ形式の修道院建築に特徴
人里離れた場所に具現される「神の国」（「神の城」）、石造天井（ヴォールト）建造
- *ゴシック建築（初期：12c.半ば～末／盛期：13c.～14c.前半）／後期：14c.後半～15c.）
神の国、天のエルサレムの具現という理念 高くなる空間 壁面の窓開放
尖塔アーチ／リヴ・ヴォールト／飛梁（フライング・パットレス）などに特徴
都市の司教座聖堂が基本、マリア崇敬との関連
- *ルネサンス建築（15c～16c. のイタリア中心）古代様式とロマネスク伝統の再統合志向
- *バロック建築（17c.～18c.）：ルネサンス建築の継承、古典主義建築、総合芸術的空間
- *18世紀建築：後期バロック様式、ロココ様式、新古典主義などの併存
- *19世紀建築：ロマン主義、カトリック復興様式（ネオ・ゴシック、ネオ・ロマネスク等）
- *20世紀建築：モダン・アート建築の登場 1920年代～

(2) 中世～近世の典礼と信仰心のあり方との関係

- *聖職者空間と会衆空間の分離、聖職者の典礼行為と信徒の祈りの空間の分離の増大
- *信仰心の変化の反映
祭壇 初期の卓型⇒箱型（聖遺物収納など）⇒壇型（司祭の奉獻行為のため）
朗読台の消滅／十字架 祭壇後壁における十字架磔刑図・磔刑像
聖櫃 聖別された聖体の保存の必要から、別個の聖体礼拝のためのものにも発展
- *トリエント公会議後（～20世紀半ば）の基本形式
祭壇の中央に聖櫃、磔刑のキリスト像が付く十字架が中央
聖体（現存するキリスト）への对象的礼拝、受難のキリストへの共感的追想に比重

→ 第2バチカン公会議前の「伝統的」聖堂空間と典礼の姿のおおよその様相

(3) 日本の聖堂建築の二つの主動向

- *近代宣教によるこの伝統的聖堂空間、典礼空間意識と
- *モダン・アート建築の導入による多様な聖堂空間づくりの混在状況

4. 現在の典礼が求める聖堂空間の基本のあり方

- *「神の民」としての教会理解をベースに、教役者の奉仕と全会衆の祭司職の行使による行動的参加のための聖堂空間づくりに向かう
- *さまざまな役割による奉仕と全共同体の一致による神との交わりの中として
- *ミサが「みことばの食卓」と「キリストの体の食卓」から成ることを基本として

『典礼憲章』（1963年）

◎芸術様式の自由

123 「教会は、いかなる芸術様式をも自らの固有のもののみならず、諸民族の特質と諸条件、また、さまざまな典礼様式の必要に従って、それぞれの時代の表現方法を認め、慎重に保存すべき芸術の宝庫を幾世紀にもわたって造り上げてきた。現代の芸術、そして、あらゆる民族と地域の芸術も、聖なる建物と聖なる儀式に正当な敬意と誉れをもって奉仕するものであるかぎり、教会において自由な活動の場をもつべきである。」

◎信者の行動的参加

124 「聖なる建物の建造にあたっては、典礼行為を行うために、また信者の行動的参加を可能にするために適したものであるように、細心の注意が払われなければならない」

資料「ローマ・ミサ典礼書の総則」（第1版1970;第3版2002）より要点抜粋

◎神の民の一致の表現のため

294「(内陣・席などの) すべては、位階的配置と種々の役割を表現するものでなくてはならない
とはいえ、聖なる民全体の一致がはっきり現れるように、内的に、そして密接に結びついた一
致を形成しなければならない」

◎内陣

295「祭壇が据えられ、神のことばが告げられ、司祭と助祭および他の奉仕者がその務めを果た
す場所である。内陣は、少し高くするか、もしくは特別な構造と装飾によって、聖堂内一般
(信者席)と適当に区別されるようにする。その広さは、感謝の祭儀を支障なく行うことがで
き、それが見えるような程度にする」

◎祭壇

296「祭壇は、十字架のいけにえが秘跡的なしるしのもとに現在のものとなる場所であるとともに、
また、ミサにおいて、それにあずかるよう神の民がともに招かれている主の食卓であり、
感謝の祭儀によって実現される感謝の行為の中心である」

298「すべての教会堂には固定祭壇を置くことが望ましい。それが生きた石(1ペトロ2・4、エペソ2・
20参照)であるキリスト・イエスを、いっそうはっきりと、たえず表すからである」

299「祭壇は、容易に周りを回ることができるよう、また会衆に直面して祭儀を行うことができ
るよう、壁から離して建造する。可能などころではどこでもそうすることが望ましい。また、
その位置は、全会衆の注意がおのずから集まる真に中心となる場所であるようにする」

◎祭壇と十字架

308「祭壇上、または祭壇の近くに、キリストの姿のついた十字架を置き、会衆からよく見える
ようにする。こうした十字架は、信者の心に救いをもたらす主の受難を思い起こさせるもの
で、典礼祭儀以外のときにも祭壇の近くに置いたままにしておくことが望ましい」

◎朗読台

309「神のことばはその尊厳のゆえに、教会堂の中にふさわしい場を設け、そこから告げ知らさ
れるものとする。それは、ことばの典礼の間、信者の注意が自然に向けられる場所でなければ
ならない。一般的には、この場所は、……固体された朗読台であることが適当である」

◎司式司祭および他の人々の席

310「司式司祭の席は、集会をつかさどる役割と、祈りを指導する役割とを表さなければなら
ない。したがって、その位置は、内陣の奥に会衆に直面して設けられることがきわめて適
当である……助祭の席は司式者の近くに置かれる。他の奉仕者のための席は、教役者の席と
明確に区別され(る)」

◎信者席

311「信者席は、信者が目と心をもって聖なる祭儀にふさわしく参加することができるよう、十
分な配慮のもとに配置されなければならない。習慣どおり、信者用の椅子、すなわち席が置
かれることが望ましい。ただし、席を特定の個人のために保留する習慣は認められない。席
は、…信者が祭儀の種々の部分において求められる動作を容易に行うことができ、拝領に近
づくのに差し支えないように配置する」

◎歌隊席

312「聖歌隊は、その本来の性格、すなわち、それが信者全体の一部分であり、特別の役割を果
たすものであることをはっきりと示すとともに、その務めを容易に果たすことができるように、
それぞれの教会堂の配置を考慮してその位置を定めなければならない。なお、その位置は、聖
歌隊員の各自にとって、ミサへの完全な秘跡的参加が適宜にできる場所でなければならない」

◎聖体を保存する場所

315「中に聖体を保存している聖櫃をミサが執り行われる祭壇に置かないようにすることは、し
るしとしての意味とよく調和する。さらに、教区司教の判断に基づいて、聖櫃は以下のと
ころに置くようにする。a) 内陣内。この場合、祭儀を行う祭壇から離れたところに、よりふ
さわしい形と場所を選ぶ。ただし、もはや祭儀のために使用されない古い祭壇の上を妨げる
ものではない。b) あるいは、他の小聖堂内。この場合、信者の個人的な祈りと礼拝にふさ
わしく、教会堂と有機的につながった、信者の目にとまる場所にする」

参考

麴町聖イグナチオ教会公式サイトより

主聖堂



司祭・侍者席・信徒席・バルコニー席・聖歌隊席のすべてが祭壇を囲み、祭壇で行われる典礼がよく見えるように配置されています。固定席数は 700 席。

祭壇を囲む主聖堂

聖堂の中心には、イエスと弟子たちが囲んだ「最後の晚餐」の食卓である祭壇が置かれています。この祭壇は、「仕えられるためではなく、仕えるために」と語ったイエスの言葉のように、聖堂のもっとも低い場所に置きました。

会衆席は食卓である祭壇を囲むように放射状に配置され、ミサに参加するすべての人々が一つの食卓に与えるように配慮されています。

聖堂を囲む十二本の柱は、キリストの教会を支える十二人の使徒たちを表します。柱は天井を支え、蓮の花をかたどった天井をとおして、ここで祈る人々の上に神の恵みである光が降り注ぎます。

さらに、楕円の壁には十二枚のステンドグラスが嵌められ、それぞれに神によって創造された大自然が描かれています。ここに集う私たちとともに、宇宙万物も神の創造の業をたたえているのです。

「新聖堂建設の為の祈り」(献堂 25 周年感謝の祈り)

父なる神よ、あなたは慈しみ深い御心から、御子イエスをこの世に遣わしてくださいました。主イエス・キリストは救いの恵みを人々に与えるため、聖なる教会を建てられ、この地に聖イグナチオ教会共同体を育まれました。今、私たちは献堂25周年(原文は新聖堂建設)を迎えて、この教会があなたの御心にかなうものとなるよう、心を一つにして祈ります。道行く人々が聖堂を仰ぎ見て心の安らぎと神の招きを感じますように。聖堂で祈る人々が御父の愛に包まれ、救い主イエスに出会うことができますように。キリストの食卓を囲む私たちが喜びのうちに礼拝と賛美を捧げ、一つの共同体として社会の光と塩になれますように。あなたの祝福が設計、募金、労働、祈り、奉仕をもって協力するすべての人々に豊かに注がれますように。

私たちの主イエス・キリストによって。アーメン」

参考

カトリック関町教会 第二代聖堂 2023年10月1日 献堂

